日本古代史ネットワーク・解明委員会 第13回

タミル語と日本語

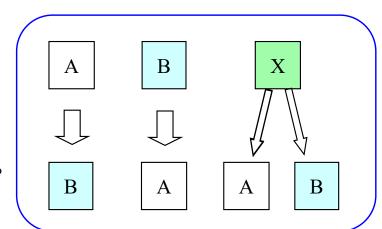
丸地コメント

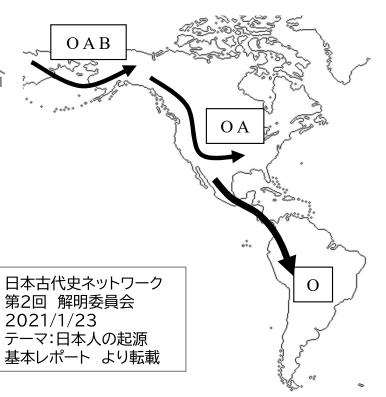
2022年1月16日(土) 丸地 三郎

同じDNAを発見! それで何が言えるか?

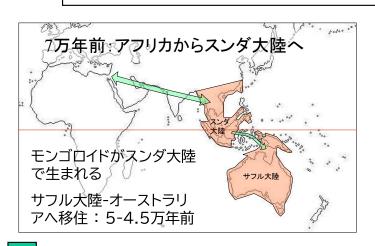
- DNAの解析から判明した事実から、ヒトの起源について、何が言えるのか?
- ▶ 地点AとBで同じタイプの遺伝子が見つかった場合
 - AからB 又は、BからAと、断定してはいけない。
 - 別の地点からAとBへ移動する場合もある。
 - 3通りの解の内の正解を見つけるには、別の手掛かりが不可欠。
 - 間違って断定すると、原因と結果が逆になる。
 - 安易に断定しているケースが多々見られ、残念。
- ▶ あるDNAグループの比率が、地域によって減少・拡大する場合 ニつの全く反対な傾向が見られるので、安易に断定は出来ない。
 - * 移動に伴い多様性が失われるケース
 - 南北アメリカの原住民の血液型の例・右図
 - 中込弥男「ヒトの遺伝」に記載
 - * 移動に伴い、他民族と混血して行くケース
 - 中心が純粋で周辺が混血度合いが大きい

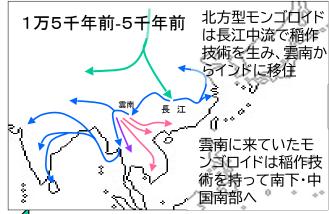
これは、DNA関連だけでなく、汎用的な留意点。 言語学も考古学にも該当。





モンゴロイドの移動ルートの概要図

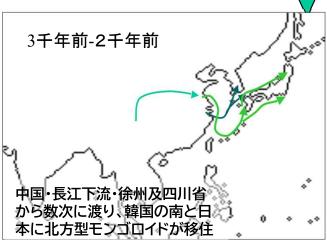


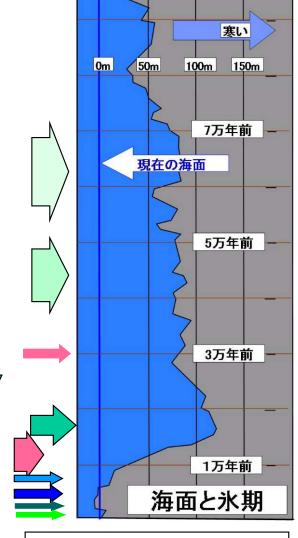








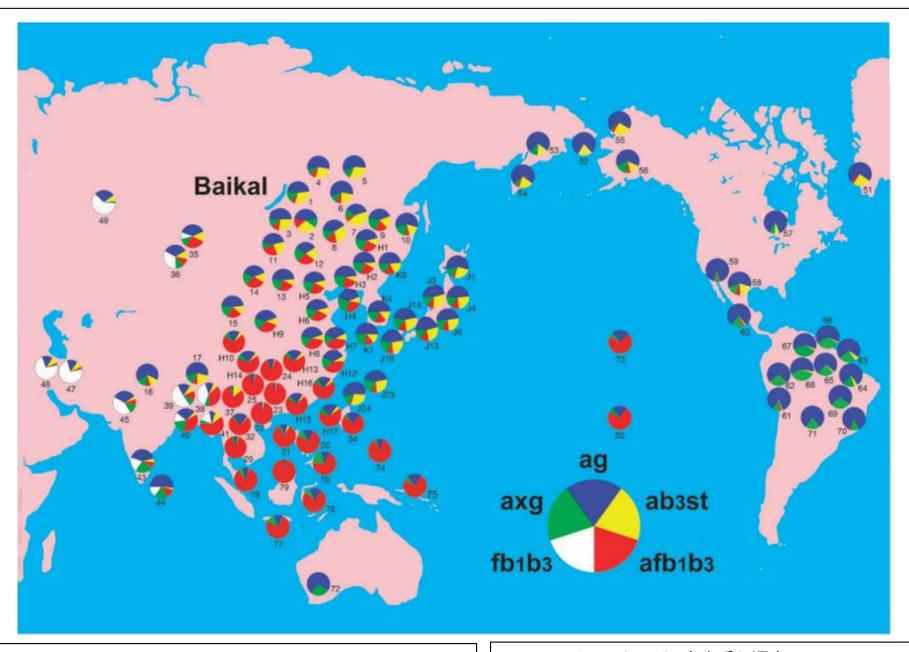




10万年前から始まる氷河期の中で、 やや温暖化の時期、厳寒期が民族の 移動の条件となった。

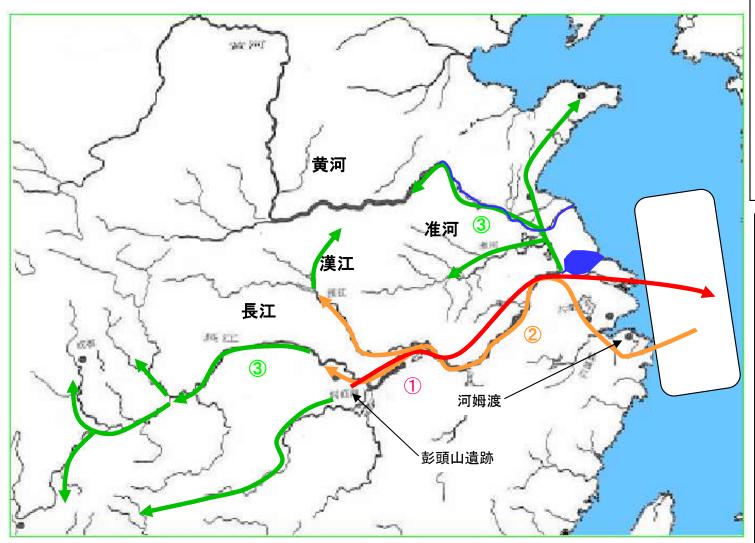
海面が下がる事は寒気の厳しさを示し、 移動の要件ともなる。

松本秀雄氏の作成した図: 免疫グロブリンG(Gm)標識遺伝子の分布 アジアと環太平洋の地域



- 最終氷河期を越え、バイカル湖から北上・南下したモンゴロイド。
- 水没し始めたスンダ大陸から北上を始めた新モンゴロイド。
- シルクロードでは、白人系と混血
- ・ 中東・インドへ進出した人々も白人と混血

1万年前~5千年前 その② 稲作の発祥と伝播



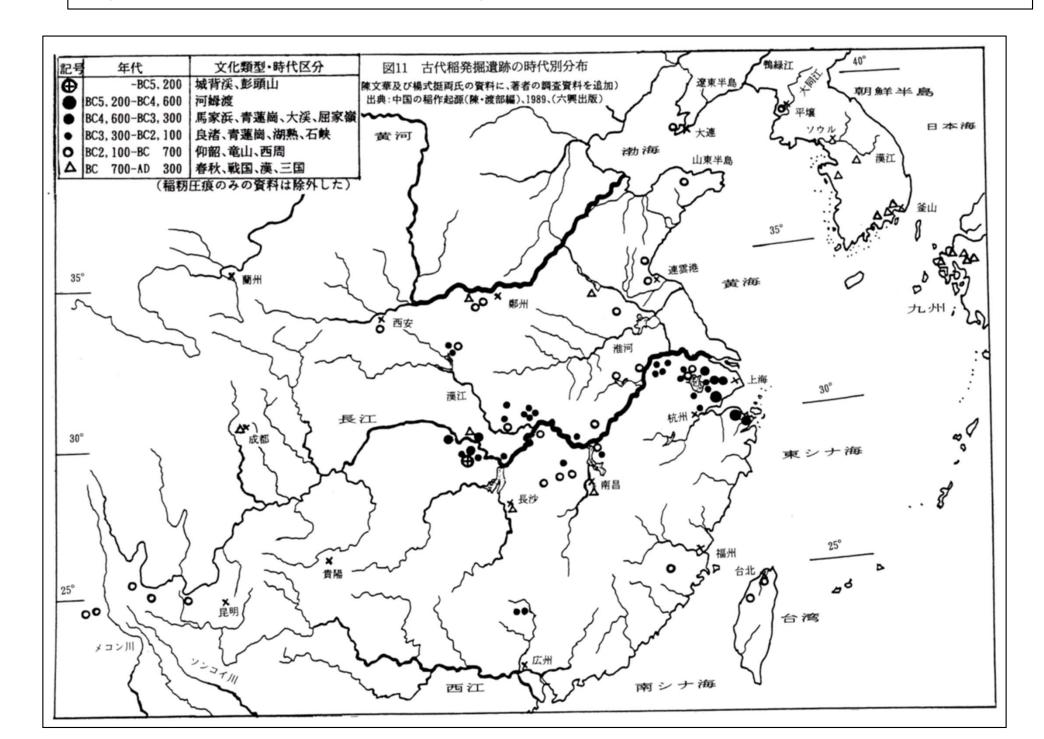
中国の古代稲・稲作農耕文化に関する遺伝・育種学及び考古学的調査研究 1992年度~1993年度(和佐野喜久生団長) の図表を利用し、 黄河と長江の流れを変更。 矢印などを追加した。

は、紀元前2070—1600年に「夏王朝の創始者の禹」が改修し、現代の流れの北方の川筋に変更した。 それ以前は、今の准河に合流していた。 古代の長江の下流と黄河の下流は近接していることに留意。 一万年前の海水面が30m低下した状態から縄文海進で約1.5m上昇した時代。

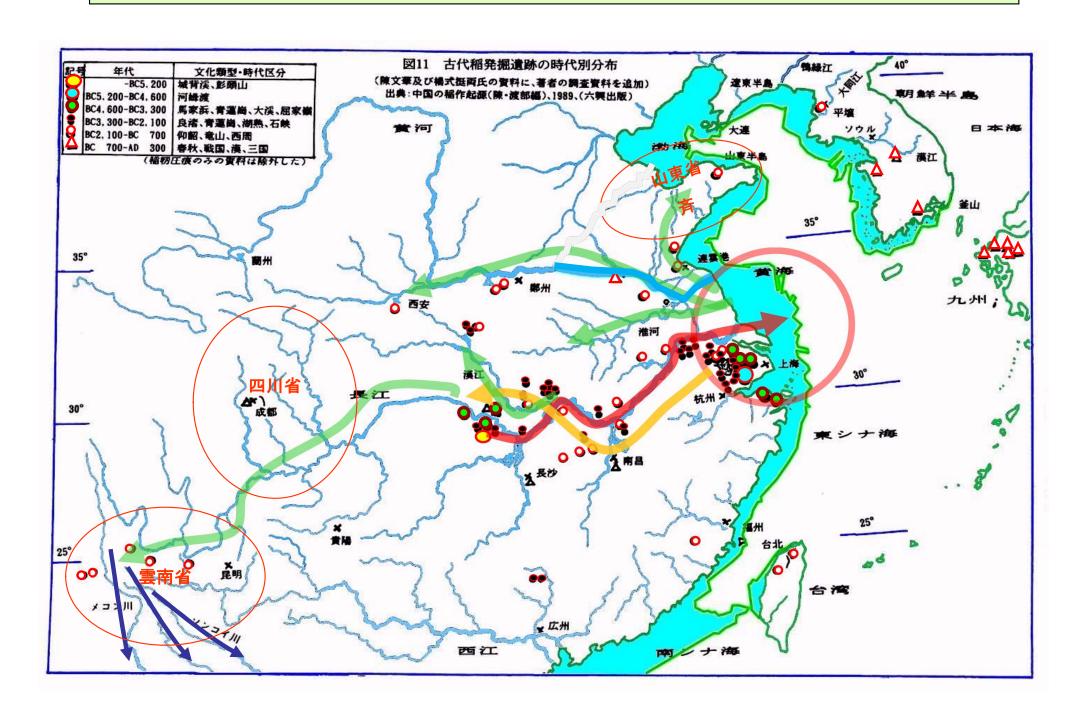
洪水を引き起こし、問題であった黄河

- ・ かっては、稲と稲作の発祥の地は インドアッサム地方・中国雲南地方と 唱えられていたが、その説は完全に 否定され、現在は長江が発祥の地と 確定した。
- ・ 稲作は、長江中流が最も古く、
- •玉蟾岩遺跡7粒米 1万2千年前
- •彭頭山遺跡BC7000年—6000年。
- 次いで長江下流の河姆渡遺跡が BC5200年。
- BC5000—3000の稲作の遺跡 は河姆渡のある江南地方と長江の下 流と中流域に限られる。
- BC2100年以降、長江の上流や、 准河、黄河中流域に伝播

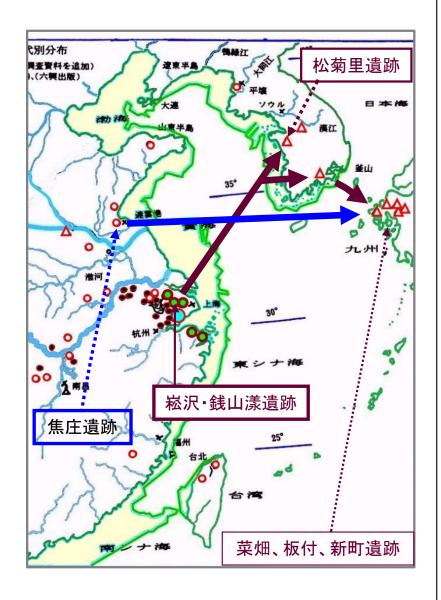
稲作の起源と時代別分布(和佐野喜久生著 東アジアの稲作起源と古代稲作文化)



古代稲発掘遺跡と "稲作の伝播"



初期の水田耕作と次期の水田耕作



「東アジアの稲作起源と古代稲作文化」 和佐野喜久雄編によると、

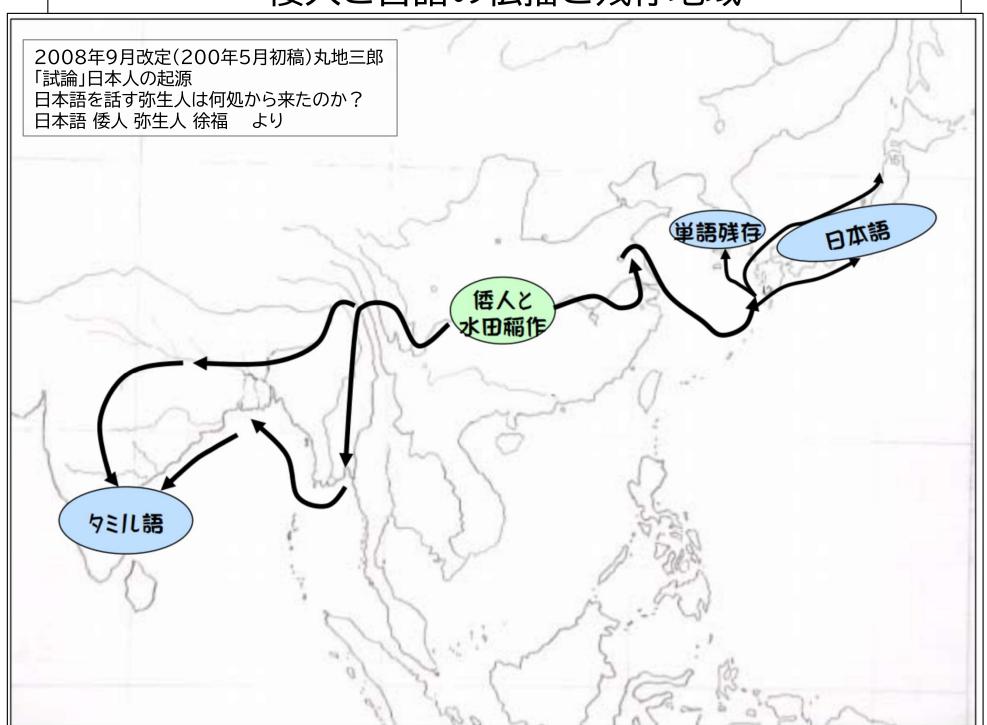
- ▶ 初期水田耕作の極短粒米は、
 - ✓ 春秋の呉の本拠地に近い崧沢遺跡・銭山漾遺跡と韓半島 の松菊里・固城遺跡から出土。

(山東半島・遼東半島・朝鮮半島北部からは出土しない。)

- 海路で長江下流域から直接、韓半島へ渡り、 韓半島から日本へ渡ったものと推定された。
- ▶ 九州西北縄文人が、韓半島に来ていた春秋呉の難民を招き入れ、水田耕作を始めたもの。
- 次期水田耕作のやや長い小粒米は
 - ✓ 山東半島付け根の焦庄遺跡のものと同一
 - ✓ 上記の極短小米は消滅し、やや長い小粒米が日本全土に 広がる。
 - 焦庄遺跡は徐福村に近接。
 - ▶ 弥生人:倭人が水田稲作を持って、渡来したもの

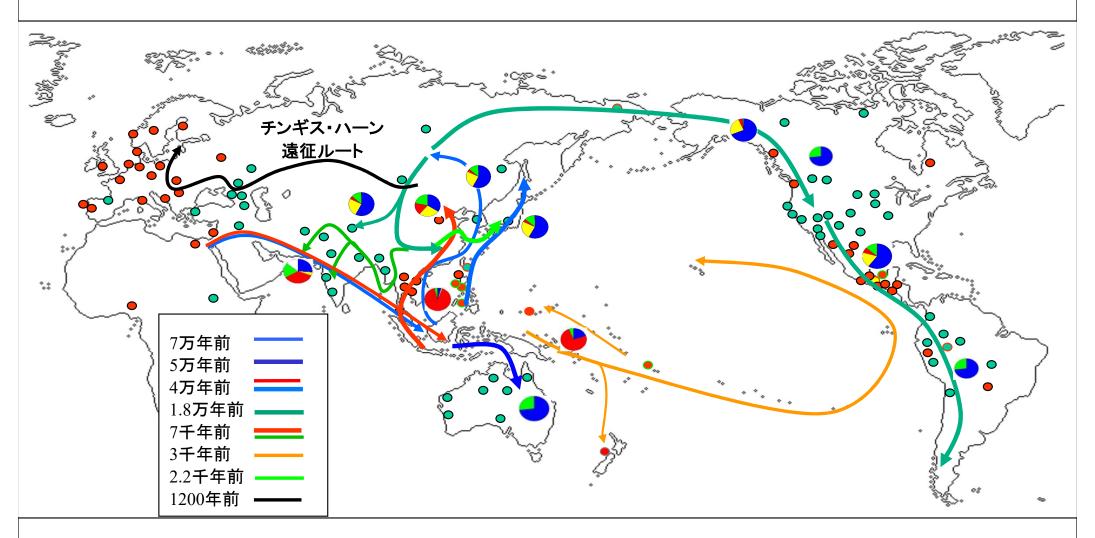
- ✓ 韓半島南部に多い碁盤式支石墓も、長江河口の 南の温州から出土し、東夷の墓制。温州は、呉の伍子胥の出身地。
- ✓ 春秋・呉の難民が韓半島に多く渡来したとの記述あり。

倭人と言語の伝播と残存地域



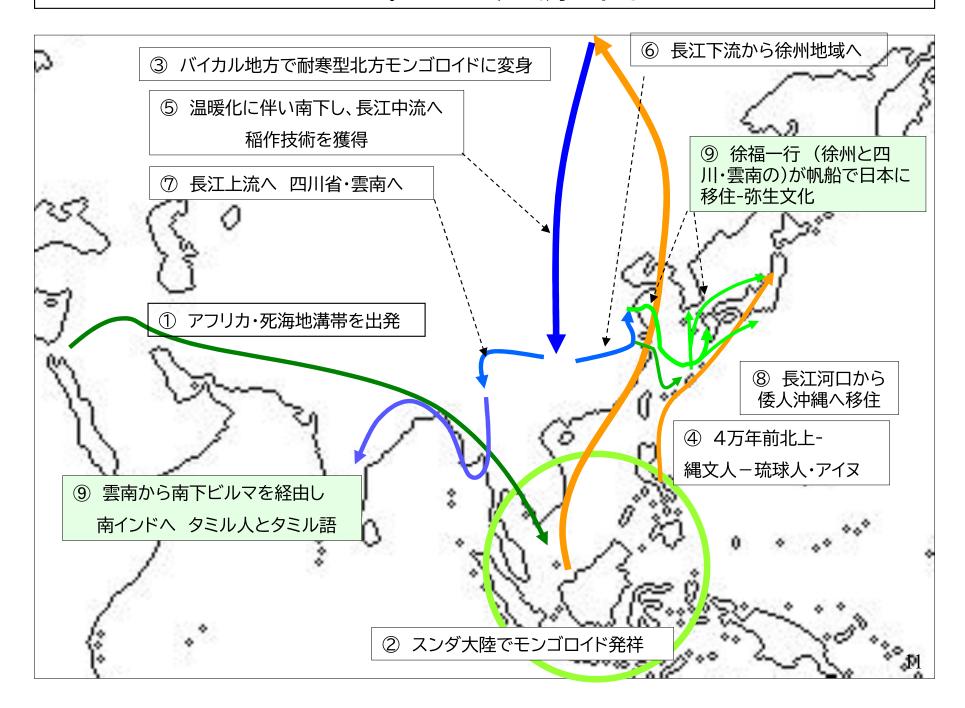
言語の分布図と人類の移動ルート/免疫グロブリンG(Gm)標識遺伝子

●: SVO:主語·述語·目的語 ●: SOV:主語·目的語·述語



スンダ大陸では:7~5万年前 🍑 4万年前 🍤 3万年前 🍑 1万年前 🗳 と推測

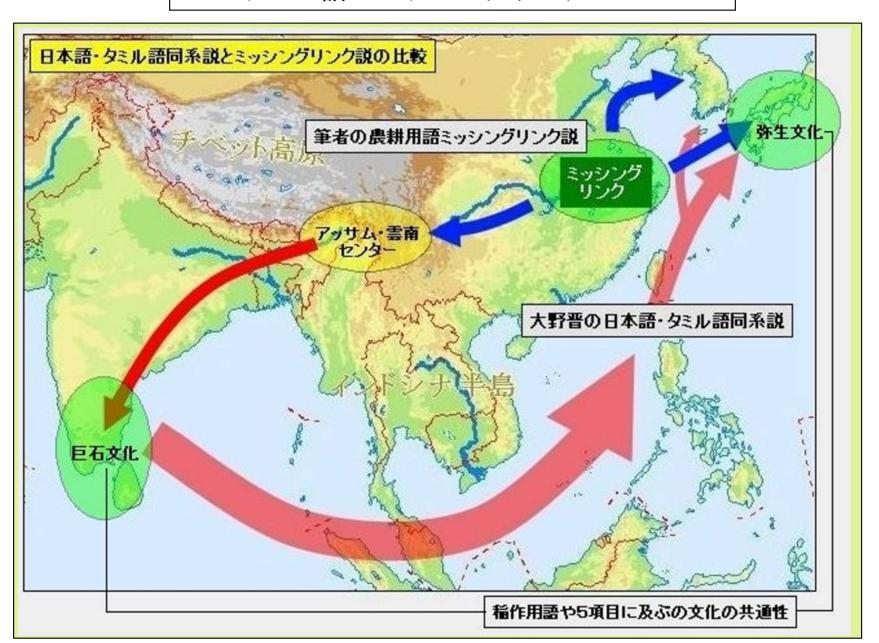
日本人の起源・図



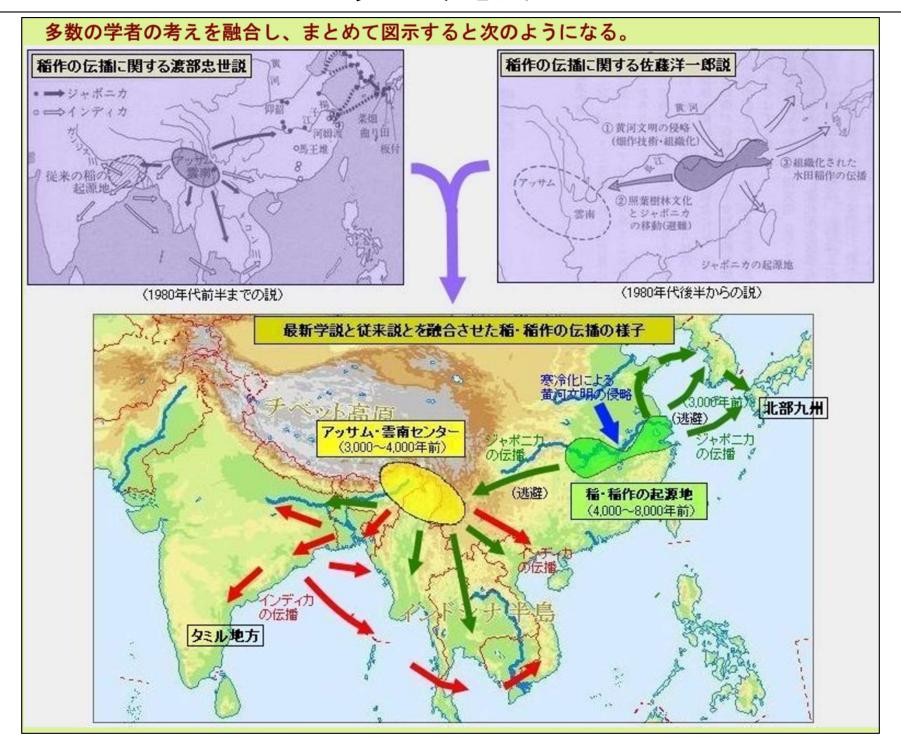
http://www.geocities.jp/ikoh12/honnronn3/003_06tamiru_go_to_nihonn_go.html いとうとしゆき氏のHP

第3部 弥生文化と渡来人の登場

07.タミル語とミッシングリンク



いとうとしゆき氏のHP



[3] 弥生時代の開始年代-鉄の観点から-

- ・弥生時代の開始はBC10世紀(新説)←かつてはBC5~4世紀とされていた
- ・中国で鉄の製造が始まったのは西周代 (BC1100~770) 後期→普及はBC500年代
- ・インドではBC1100年に鉄が製造されていた ←「リグヴェーダ」の記述
- ・日本で弥生時代初期 (BC10世紀) に鉄を使っていたとすると中国より早いことになる
- ・弥生時代初期に南インドから鉄が輸入されたとすると矛盾なく説明できる
- ・タミル語「kan (銅)」、日本語「kane」

[4] 文字以前の記号 (グラフィティ、Graffiti marks)

- ・甕棺や土器に刻まれた記号が南インドと日本で共通
- ・Graffiti (英語) の意味は「落書き」
- ・単なる落書きではなく何らかの意味を有する ……製造者、氏族、動物、植物、武器、雨、蛇、米
- ・中国(山東半島)や朝鮮でもグラフィティが発見された
- ・インダス文明のハラッパー、モヘンジョダロからも出土
- ・南インドの巨石時代の文明はインダス文明を受け継いでいる
- ・インダス文明の担い手がドラヴィダ語を話していた可能性が高い
- ・その後、南インドではブラフミー文字が広まったが、その頃には南インドと 日本の関係が途切れてしまったため、ブラフミー文字は日本に伝わらなかった (→東南アジア全体には広がる)

[3] 弥生時代の開始年代-鉄の観点から-

- ・ 弥生時代の開始はBC10世紀(新説)←かつてはBC5~4世紀とされていた
 - ・中国で鉄の製造が始まったのは西周代(BC1100~770)後期→普及はBC500年代
 - ・インドではBC1100年に鉄が製造されていた ←「リグヴェーダ」の記述
- ・ 日本で弥生時代初期(BC10世紀)に鉄を使っていたとすると中国より早いことになる
 - ・ 弥生時代初期に南インドから鉄が輸入されたとすると矛盾なく説明できる
 - タミル語「kan(銅)」、日本語「kane」
- ✓ 日本で弥生時代初期(BC10世紀)に鉄を使っていたとすると中国より早いことになる
 - > この解決策
 - 1. 歴博の解決策:弥生時代の初期の鉄の遺物の発掘記録を再検討した結果
 - → 記録が正確でない。 出土写真が無い。 位置も不明確。 従って、弥生時代初期の鉄の出土は不明確で、実際には、無かった。 後の時代のものを初期とした。
 - 2. 弥生時代の開始はBC10世紀(新説): 弥生時代は500年遡らない。丸地説
 - → 季刊「古代史ネット」第2号 弥生時代の開始時期に、500年遡上説の誤りを指摘。

[2] 南インドと日本の海上交通 ーガラスのビーズー

[弥生時代の船]

・弥生時代中期の土器に36人漕ぎの船の絵がある(奈良県清水風遺跡)

<岩田明の検証>(1992年)

- ・シュメールの粘土板に書かれた船の材料で帆船を建造(南インド・ケララ州) (全長15メートル、30トン、2枚の帆)
- ・7人のタミル人を雇ってスリランカからシンガポール、台湾経由で日本まで渡航 →沖縄久米島で横転したが、沖縄まで来ることができた
- ・マレーシア、シンガポールにはタミル人が多数住んでいる
- ・ベトナム難民が日本に漂着
- →南インドから日本まで帆船によって来航が可能(船団を組んだ可能性)

[ガラスのビーズ]

- ・日本でインドパシフィックビーズが発掘(北九州、BC3~2世紀)
- ・インドパシフックビーズは南インドから東南アジア各地に流通 →日本列島、朝鮮半島まで及ぶ
- インドパシフィックビーズは赤褐色のガラスのビーズ

南インドと日本の海上交通 ーガラスのビーズ

- 関連する事実 : 沖縄八重山諸島出土の貝斧(シャコガイ製) 小田静夫さんによる
 - ・ 安里嗣淳氏は、フィリピンのバロボク岩陰遺跡の発掘調査に参加して、沖縄の貝斧(宮古島・浦底貝塚)について述べています。
 - それによると、バロボク岩陰の下層(5,000年前)は無土器文化で、上層(2,500年前)は磨製石斧 などが発見されました。
 - 貝斧の発生に関して、
 - 下層の剥片貝器(打製貝斧)から、
 - 上層になって磨製石斧の影響を受けて
 - 研磨して「磨製貝斧」が出現し、
 - ・ それが沖縄の先島諸島(宮古島、2,500年前)に伝播したと推定しています。
 - フィリピンと先島の貝斧の素材は、大ジャコの蝶番部分を利用し、ミクロネシアの貝斧は腹縁部を使用することから、別の系統と考えられています。以上です。
 - 産地不明だった貝斧はフィリピン産と判り、沖縄の石斧を参考に製作され、沖縄に輸入されたことが判明。
 - フィリピンには、この形の石斧は出土したことが無い。
 - 沖縄宮古島島民の交易範囲は、2500年前=BC500年には、東南アジアまで広がっていたことを示す。
 - 「インドパシフックビーズは南インドから東南アジア各地に流通」していたならば、
 - 沖縄人がBC500年頃から、ビーズを入手し、沖縄にもってきた可能性が高い。
 - 沖縄人は、日本海側の航路を使い、北海道・糸魚川(ヒスイ)・出雲・九州と交易していた。
 - 日本でインドパシフィックビーズが発掘(北九州、BC3~2世紀) ← 沖縄人の交易の結果では?